

「創立20周年記念フォーラム」を 開催して

事務局長 小田中徹也

私たち近畿病院図書室協議会は1994年、創立20周年を迎えた。そこでこれを記念するとともに、現在の病院図書室を取巻く環境や状況の変化、今後の展望を広く識者を招いて考えてみる機会を持つことにした。春の4月から企画案を練り、会場の確保や講師交渉などの準備作業をすすめてきた。また、私たち協議会としては初めて案内のポスターを作成し、全国の医学図書館をはじめ地区のネットワークや図書館関連の機関にも配布するなど、意図的に「病院図書室」の宣伝PR活動をおこなった。

そして11月9日、京都市国際交流会館において記念行事を迎えた。会場は岡崎公園の一角に位置し南禅寺を眼前としながら、国際色豊かな人々の集うモダンで美しく20周年を記念するにふさわしい会場であった。また、当日は秋晴れにも恵まれ、全国から約90名もの参加者があった。以下、その模様について簡単に紹介致す。

当日の記念行事は、「近畿病院図書室協議会：創立20周年記念フォーラム」として、シンポジウムと記念講演そして懇親会の3部で構成した。まず、啓蒙的な意図をもって企画した「変化の中の病院図書室」をテーマとするシンポジウムには、5人のシンポジストの方々に講演をお願いした。次に、今後の医療において大きな比重を占める老人医療を学ぶため、特別記念講演には柏木哲夫大阪大学教授をお招きした。以下、プログラムに沿って内容を紹介する。

1階イベントホールで開いたシンポジウムは、司会を星ヶ丘厚生年金病院の田伏薫先生

と私の二人で担当し、まず、田伏先生からシンポジウム開会の挨拶があった。続いて、最初のシンポジストとして、北野病院の沢田眞治先生から「継続教育・臨床研修における病院図書室の役割」と題して、管理者・利用者の立場から病院図書室の果たすべき役割を提示して頂いた。北野病院図書室の実情を紹介されるとともに、医学情報が役立ったご自身の症例を具体的に紹介されながら、図書館への期待を語って頂いた。厳しい病院経営の中で、医療の質を維持し高めるためには図書室へ大きな期待がかかっていることが窺われた。

次に、国立京都病院の新島京先生からは同じ利用者の立場ながら、海外における医学図書館の例を「アメリカにおける病院図書室；Mt. Sinai Hospital の図書館を利用して」と題して紹介して頂いた。ニューヨーク市内に位置する病院の特色とともに図書館での体験を多くのスライド写真を使って楽しく紹介して頂いた。単に文献情報の提供だけでなく創造的なサービスも行っている図書館の姿があった。日米の間では病院図書室の規模や条件が異なるものの、図書館が果たす役割の多様性には学ぶ点が多いようである。

3番目に、高山赤十字病院の木下久美子氏には図書館員の立場から、「病院図書室と図書館員の専門性」について報告して頂いた。予算や人員、スペースなど多くの問題点を抱える病院図書室において図書館員が果せる独自の役割について提示され、情報の専門家としての重要性が強調された。病院において図書館員が果せる専門性とは、やはり「情報の達人」であろうと思われる。そのためには、

図書館学の基礎的な知識の他に、語学やコンピュータなど情報にアクセスする広い手段を一定自分のものとすべき必要性が感じられた。

4 番目には、自治医科大学図書館の青木孝雄氏に「日本医学図書館協会と病院図書室」と題して、理事の立場から日本医学図書館協会の活動を中心にお話し頂いた。特に昨年度は、同協会が入会基準の撤廃など組織上の大きな変革を行ったことについて、その意図や目的について詳しく説明があった。病院図書室との協力関係のあり方についても、既存のネットワークと競合するものではなく重層的な関係を目指したいとの見解であった。また、同協会が新しく作成された「日本医学図書館協会入会案内」が当日、参加者に配布されたことから、ネットワーク拡大への熱意が窺われた。私たち病院図書室の関係者にとって、より開かれた日本医学図書館協会の姿勢を歓迎するとともに、病院図書室のネットワークが拡大し発展していくことに結びつくよう期待される。

そして、最後のシンポジストとして札幌医科大学の辰巳治之先生には「インターネット・コンピューティングの紹介とそのバックグラウンド」についてお話し頂いた。現在、日本でも爆発的に普及しつつあるインターネットは、情報伝達の形態を根本的に変えつつあり、今後、図書館の機能や役割にも大きな影響を及ぼすと思われる。先生は現在のインターネット・コンピューティングを第二のルネサンスとして位置づけられ、個々のコンピュータ・リテラシーの重要性を説かれた。コンピュータをユーモアを交えてわかりやすく説かれ、参加者はその魅力と必要性を再認識したように見受けられた。病院図書室のような小図書館にとって大きなパワーとなりうるコンピュータは、今後ますます大きな役割を果し、好き嫌いを越えた存在になるだろうと感じた。

以上、シンポジウムでは今日の病院図書室を取巻く「変化」の中の状況を5つの側面から考えた。それは、利用者からの病院図書室へ

の大きな期待、海外における病院図書室の役割、担当者側からの専門的サービスの可能性、図書館相互協力の新しい展開、コンピュータ・ネットワークの拡大と普及、に要約されるだろう。これらはどれもが、2時間余りのシンポジウムには大きなテーマであった。そのため、終了予定を30分以上も超過したにもかかわらず、各シンポジストの先生方には充分にお話し頂けなかったのが残念であった。

次に、講演開始の大幅な遅れを快く了承して頂いた柏木哲夫先生から、「老いを考え死を学ぶ」と題する特別記念講演があった。淀川キリスト教病院院長の白方誠彌先生が司会の中でご功績を紹介された後、講演に入った。淀川キリスト教病院ホスピスにおける死を迎える人々との経験を紹介され、感動的な多くの例を教えて頂いた。そこには、死を受入れた人々の平静な日常生活があり、家族（動物も含めた）との交流や草木の鑑賞など、日常的でささやかなことに大きな喜びを感じている姿があった。高齢化社会を迎える中で、病院医療の在り方を考える上だけでなく、老化や死を迎える自分自身を考える上でも、感銘深い講演であった。

シンポジウムと特別講演の充実した余韻が残る中、会場を2階の特別会議室に移し懇親会に入った。南禅寺の夜景が展望できる会場には特別講演の柏木先生やシンポジストの先生方をはじめ、60余名の参加者となった。会長の挨拶に続き、日本医学図書館協会の関係者の方々や病院図書室研究会の石沢会長からは温かい祝辞を頂いた。更に、医学図書館の方々をはじめ会の内外から多くの方々駆けつけ盛上げて頂いた。更に、各地区のネットワークからも祝電を頂き、そのご厚情を忘れることはできない。この懇親会ではまた、京都南病院の箏曲部の皆さんによる演奏が花を添え、20周年を記念するに相応しく和やかなうちにも華やいだ会であったと感謝している。

この他、当日はキャノン販売株式会社のゼロワン・ショップ京都支店から、Macintoshをはじめとする数々のOA機器の展示に協力

して頂いた。また、書店や情報関連業界の方々からも参加を得るなど、多くの方々はこの記念フォーラムを盛上げて頂いた。更に、ささやかな記念のテレホンカードも多数の方々に購入して頂き、望外の喜びであった。

春から準備した今回の記念フォーラムは以上をもって無事終了した。反省点も多くあるが、それは敢えて問わないことにして、一つの節目としてやはり開催して良かったと思っている。人員や予算において暗い材料も多い現在の病院図書室において、果すべき役割や機能、今後の可能性や展望を広い視野から考えてみることは決してムダではなかったと思っている。そのため、普段は地味なきらいのある病院図書室関係者の集りを今回は少し派手目になるよう心掛けた。

過去20年間の私たち協議会の活動は、日本

の病院図書室の充実と医療への貢献に少なからず寄与できたものと自負している。これはもちろん、会員各機関の理解と協力があったことだが、関連各団体や図書館の温かいご支援と協力を抜きには考えられない。これから21世紀に向け、医学や医療またその情報技術の形態は確実に変化していく中で、病院図書室の新しい在り方を考えていかなければならないと思われる。

本稿は雑誌『医学図書館』42巻1号1995年に既に掲載された原稿に若干の修正を加えたものである。またその後、今年に入り阪神大震災をはじめ社会的には悲惨で不可解な事件が続き、私たちにとって大仕事だったこのフォーラムも、今や遠い過去の思い出のような懐かしさを感じている。

